

司馬遼太郎

燃えよ剣

下卷

けん 燃 え よ 剣
下 卷



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 152 I

昭和四十七年六月十五日 発行
昭和四十九年三月二十日 四刷

著 者 司馬 遼太郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

燃 え よ 劍
下 卷

司馬遼太郎著



新潮社版

2060

燃えよ剣 下巻

二条中洲なかつすの決闘

卷

駕籠かごが二挺ちよう。

歳三としぞうと七里研之助をのせて、月明の大路を、東へ駈かけ去った。

月は、冲天ちゅうてんにある。

決闘には都合のいい月夜なのだ。すこし欠けているようだが、幸い、天に雲がない。町々のい、ら、かが、銀色に燦いぶっている。

駕籠が駈け去ったあと、この越後屋町の「与兵衛」の店に、浪士風の男が三人、のっそりあらわれた。

七里研之助が集めた浪人である。むろん、七里としめしあわせての行動だった。

「親爺おやぢ。いまの駕籠、行くさきはどこだ」

「存じまへんな」

親爺は、ぶあいそうに答えた。

「知らん？」

「へい。うちは酒一本、甘酒一椀わん売っただけで、行くさきまで知りまへんどす」

京者は、ものやわらかいとはかぎらない。偏屈者になると、酔すでもこんにくでも食えない手

合がいる。

ぎらっ、と一人が刀をぬいた。

おどしではない。眼が血走っていた。町々で天誅てんちゆうさわぎをおこしている連中だから、本気で斬きるつもりだろう。

親爺は、これには閉口した。

「ああ、二条河原どす」

「間違いないな」

「おへん」

「うそとわかれば、もどってきて叩たたつ斬るがよいか」

「へへ。与兵衛は、うそまで売りまへんどすさけ、安心してお行きやす」

京弁の口悪さというもののほど憎態にくていなものはない。

浪人の一人が、与兵衛親爺にとびかかってなぐり倒した。

(あっ、おんどれ奴めア)

与兵衛はかっとなった。若いころ、ばくちも打ち、牢ろうにも入り、目明しの手先もつとめたこともある男だ。

表へ駈けだしたが、そのときは浪人の姿はもうなかった。

与兵衛も昔とった杵柄きねづかで、人体にんていはわかる。先刻の客が、どうやら新選組、それも京の浪士どもをふるえあがらせている土方歳三ひじかただと見ぬいていた。

(あの浪人ども、押しつつんで土方さんを斬る計略だな)

見て知らぬ顔、というのが京かたぎだし、与兵衛親爺もそのつもりでいたのだが、こうなつては腹の虫が承知しない。

花昌町の新選組屯所へ駆けだした。しかし道のりは半里ほどあるだろう。

歳三は、二条堤に降り立った。

「いいあんばいな月だ」

巻 眼の下の鴨川に月が落ち、瀬にきらきらと光っている。対岸にはわずかに町並があるのだが、すでに灯が消えていた。

この当時、二条の橋というのは、三条のように一本渡しの大橋ではない。鴨川中洲まで欄干も手すりもない板橋が一つ。

下 さらにその中洲からむこう岸まで、第二橋がかかっている。その第一橋と第二橋のあいだの中洲は、葦や秋草が繁っていた。

歳三と七里は、その中洲へ出た。草を踏むたびに虫の音がやんだ。

「七里、抜け」

と歳三は、草を一本、口にくわえた。

「ほう、もうやるのかね」

七里は、落ちついている。なかまの来着を待っているのだらう。

「土方、冥土へいそぐことはあるまい。なんなら、国許への遺言でもきいておいてやろうか。」

……いや、それより、例の」

「ああ、お雪のことかね」

歳三は、先手を打った。

「そう。あれはいい女だな。そのお雪とやらに申しのこすことはないか」

「お前、親切だな」

歳三は、草を嚙かんでいる。どこかで鈴虫が鳴いているのを、じっときいていた。

「土方、念のためにいっといてやるが、おれも武州八王子のころの腕ではないぜ。これでも京では人斬り研之助といわれた男だ。人の二十人は斬ったろう。そのなかに、新選組が七人、見廻組が二人」

「結構なことだ」

このころ、隊士が市中でしばしば斬られる。七里らの仕業しわざかもしれない。

そのとき、ふと板橋のきしむ音が、遠くでした。

東岸から第二橋へ、西岸から第一橋へ、それぞれ人影が渡りつつある。あわせて七、八人の人数はいるだろう。

「土方、まずい。人がきたようだ」

と、七、八間むこうの草むらの中で、七里研之助がちよつとはずんだような声でいった。

「ああ、来たようだな」

と歳三はすばやく羽織をぬぎすてた。この喧嘩けんかなれた男には、それが、七里の人数だと直感された。人数が来着するまでに七里を斬りすてなければ、とても勝目がない。

袴はかまのももだちをとった。下げ緒で、くるくるとたすきをかけ、

「七里、参る」

ツツと進んだ。歳三は鯉口こいぐちをきった。刀は愛用の和泉守兼定いずみのかみかねさだである。

脇差わきざしは、堀川国広。

きらり、と七里の草叢くさむらから淡い光りがひかった。抜いた。

七里は上段。

歳三は、いつもの平星眼ひらせいがんで、近藤、沖田とおなじ癖の右寄り。歳三はこの癖がいつそうひどく、左籠手ひだりこてがほとんど空あきっぱなしになっている。

七里、間合を詰めた。

そのとき、人数が両橋を渡りきって、中洲の七里のそばにかたまった。

みな、だまって抜きつれた。

下
(まずい)

と、歳三はおもった。七里の素朴すぎるほどの策に、自分ほどの策士が乗った。武士だ、おれとお前とで——、と七里はいった。歳三の性情を見ぬいている。武士だ、といえば、この百姓武士が気負いたって乗ることを見ぬいていたのだろう。

(近藤を笑えねえよ)

歳三は、自分が腹だたしくなった。おれがわるいのさ。七里研之助のような上州の百姓あがりの劍客と、武州の喧嘩師の自分とが、

——武士の約束。

などというのは、滑稽劇ではないか。武士の約束、なんざ、と歳三はおもった。三百年家祿で養われ、儒教や作りものの徳川武士道で腑ぬけのようになっていた門閥武士どもがいう口頭禪で、自分や七里、長州の過激連中といった乱世の駆け歩きどものひっかつぐべき神輿じゃねえ、とおもった。

歳三の背後は、瀬。

中洲には、楯にとるべき一本の樹もない。

(今夜が最後か)

むろん、いつの喧嘩のときも、そう覚悟している。命はない、と思いきんで打ちかかる以外に、喧嘩に勝つ手はない。

七里の剣は、二尺七寸はあるだろう。

剣は天に伸びながら、影は下へ、足下へ、地へ沈んでいる。敵ながら、みごとに備えであった。七里は、間合をつめている。抜きつれた七里のなかまも、平押しに押ししてくる。

歳三を瀬の際に押しつめようとするのだろう。

「おい」

七里は笑った。

「武州ではだいぶ煮湯をのませてくれたが、どうやら、今夜が縁の切れ目らしい」

歳三はむっつりだまっている。相手はじりじりと押しってくるが、歳三は半歩もひかず、間合の一方的につまってくるがままたまかせている。よほどの度胸がなければこうはいかない。

相変らず、平星眼。

「土方、お前が居なくなれば、京は静かになるだろう」

「よく喋る」

歳三はいったつもりだが、さすがに声がかすれていた。汗が、頬へ流れた。

七里。――

そのままの上段。

すでに武州以来数度の撃ち合いで、歳三の剣の癖を知りぬいていた。歳三という男には、小技
で仕掛けるといい。それも左籠手。癖で、あいている。

七里は、気合で、誘った。

歳三は動かず。

下
七里は踏みこんだ。

とびあがった。

上段から、電光のように歳三の左籠手にむかって撃ちおろした。

が、その前、一瞬。

歳三はツカをにぎる両拳を近よせ、刀をキラリと左斜めに返し、同時に体を右にひらいた。む
ろん、眼にもとまらぬ迅さである。

憂っ

11
と火花が散ったのは、和泉守兼定の裏鎧で落下した七里の太刀に応じたのだ。七里の太刀がは

ねあがった。体が、くずれた。

そのとき歳三の和泉守兼定が中空で大きく弧をえがき、七里研之助の真向、ひたいからあごにかけ、真二つに斬りさげていた。

死体が倒れるよりもはやく、歳三の体は前へ三間とんでいた。

一人の胴。

さらに一人の右袈裟。

歳三は、前へ前へと飛んだ。

板橋へ。

板橋の橋上で左右をまもる以外、自分をこの死地から救いだす手はなかった。

燃 え よ 剣

与兵衛親爺が、花昌町の屯所に駆けこんで、門番に訴えた。

門番は、一番隊組長沖田総司に急報した。

じつのところ、沖田は、市中巡察から帰ったあと、例によって体が熱っぽく、袴もぬがずに臥せていたのだが、跳ねおきた。

「一番隊、私につづいて頂きます。行くさきは二条河原」

もう庭の厩舎へとびこんでいた。

隊には数頭の馬を飼っているが、近藤の乗馬が二頭ある。そのうちの白馬は会津侯からの拝領のもので、逸物とされていた。

「開門、開門」

と叫びながら沖田は、鞍くらを置き、大いそぎで腹帯を締めた。むろん無断借用である。鞍上あんじょうに身を置くや、だつ、と八の字に開門した正門からおどり出た。路上は、あかるい。

堀川をまっすぐに北上し、二条通の辻つじで東へまがったときに両袖をたすきでしぼりあげ、西洞院いん、釜座かまざ、新町しんまち、衣棚ころものかたなまできたとき、汗どめの鉢巻はちまきをしめた。

卷

歳三は、やっと板橋の東のはしにまで、体を移動した。

が、相手も心得ている。背後の板橋の橋上にふたり、前の中洲に三人。選りすぐりの連中らしく、手ごわい。おっそろしく腕が立つうえに、一步も退ひかない。

下 歳三は背をひるがえすや、ひるがえした勢いで片手なぐりに橋上の敵を斬った。胴たうにぶい音がしたが、斬れない。刀身に、脂あぶらがまわったのだらう。

すばやく、刀をおさめた。

そのすきを撃ちかかった中洲の敵が、ひらききった胴の姿勢のまま、血煙をたてて流れへ落ちこんだ。

歳三は、堀川国広をぬいている。

乱闘のときの心得で、長さ二尺にちかい大脇差をえらんである。

が、もはや、面撃ちはきかない。小太刀で面へとびこむのは、冒険すぎるだらう。

中洲側の一人が、橋上に踏みこみ、二つ三つ踏み鳴らしつつ、だつと突いてきた。

歳三は、半歩さがって、きら、と刀を左肩にかついだ。

相手は、意外な構えに動揺した。瞬間、歳三は飛びこんで、右籠手を斬り落した。そのときである。沖田総司の馬が堤上に跳ねあがったのは。

鞍からとびおりて馬を放し、堤を駆けおりながら、

「土方さん」

と、この若者にはめずらしく甲高い叫び声をあげた。

歳三は、応答できない。小太刀のためにどうしても、受けが多くなっている。

沖田は橋上に駆けこむや、歳三の背後の男を、水もたまらずに斬っておとした。

「総司か」

やっと、声が出た。

「総司ですよ」

沖田は歳三の横をすり通りつつ、歳三の前の敵へ、あざやかな片手突きをくれた。声も立てず、相手は倒れた。

あとは、逃げ散っている。

「何人居ました」

沖田はあたりを見まわしながら、刀をおさめた。

「数える間もなかった。今夜だけはおれもだいぶ、うるたえたらしい」

「斬ったなあ」

沖田は、中洲を歩きながら、死体をかぞえている。

一人、沖田の足もとで、びくっと動いた。

歳三は、はっとしたが、沖田はべつに警戒もせず、その男のそばにかがみこんだ。

「あんた、まだ息がありますね」

道端で立話するような、ゆっくりした声調子である。

「傷はどんなぐあいです」

沖田は懐ろから蠟燭を出し、燧石を打ってあかりをつけた。

左肩に、傷口がある。が、歳三の刀に脂が巻いていたらしく、深くはない。打撃で、気を喪つ

ていたのだろう。

「これア、助かる。――」

男の片肌をむき、血止め薬をつけ、そばの死体の袴を裂いて、傷口をしばった。

下
そのまま草の上に臥かせ、医者をよんでくるつもりか、板橋を西へ渡って行った。

歳三は、中洲の上に寝ころんでいる。ひどい疲労で、立っていられなかったのだ。

(物好きなやつだ)

と沖田を思った。

(あいつは病い持ちだから、ついいいたわりが出るのだろう)

寝返ってうつぶせになり、瀬の水へ顔をつけた。水をのんだ。

顔の中を、水が過ぎてゆく。ふと生きかえったような気がして、顔をあげた。

怪我人が、いった。